

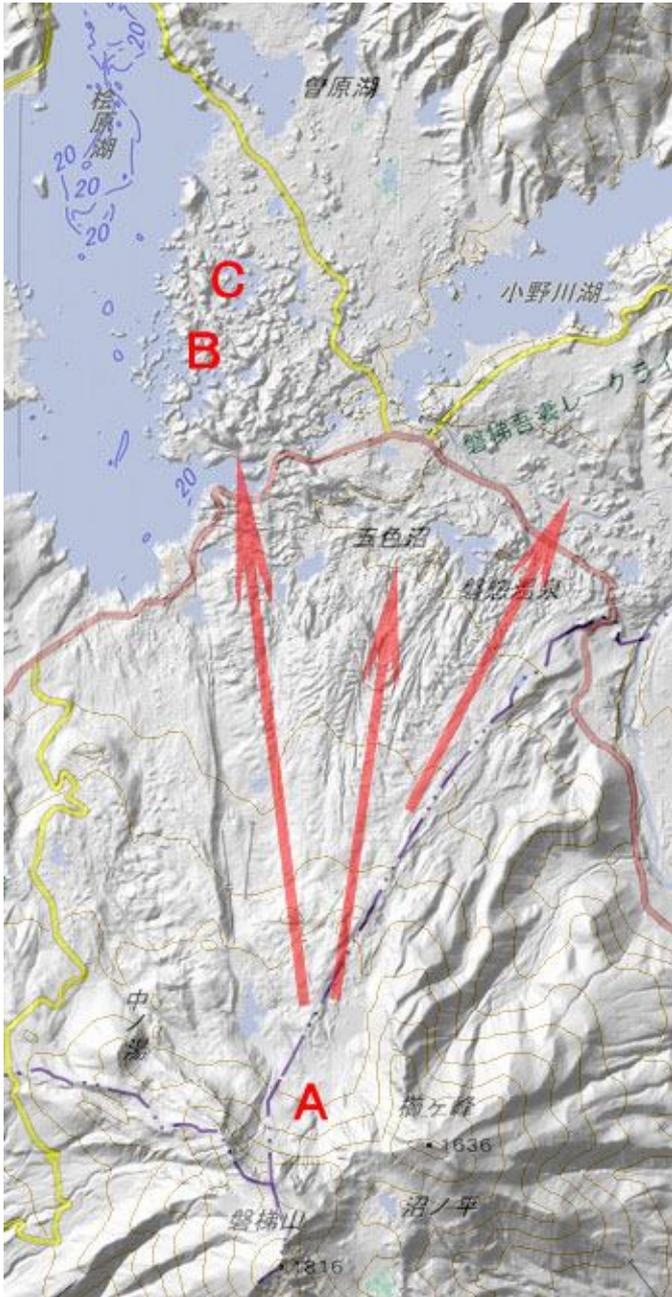
「裏磐梯紀行(12)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

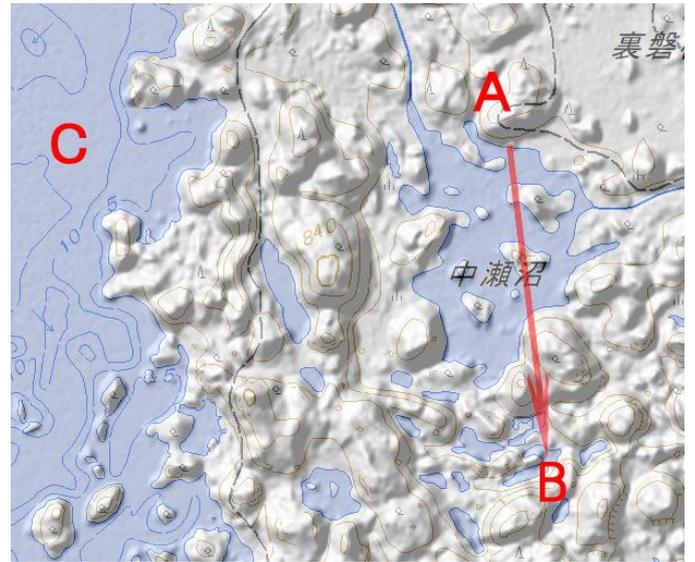
田中 千尋 Chihiro Tanaka

磐梯山は有史以来、複数回の大きな噴火を繰り返している。1888年(明治21年)の噴火(山体崩壊)は破局的で、北山麓に甚大な被害をもたらした。



上図は、国土地理院の地形陰影図と標準地形図を重ね、当方が作図したものである。Aが山体崩壊を起こした「火口瀬」に相当する地形、Bにはその結果押し流された多数の丘(流れ山)、Cはその流れ山の間隙の窪地に水がたまってできた「中瀬沼」である。

この中瀬沼は、裏磐梯の他の湖沼とはちょっとちがった景観を楽しめる。「湖畔」からではなく、高い位置から俯瞰する景観なのだ。写真では木々が繁茂して、湖面がよくわからないが、ずいぶん下に湖が見える。



このことは、地形陰影図を拡大してみるとよくわかる。上図のAが中瀬沼展望台で、標高は842mである。Bが磐梯山の方角、Cは桧原湖の湖面である。中瀬沼展望台は、磐梯山体崩壊でできた、おびたしい数の「流れ山」の一つの上にあるとわかる。中瀬沼の湖面標高は815mなので、比高は27mもある。こんなに大きな「物体」が、8kmも離れた磐梯山山頂付近から押し流されてきたのだから、その威力はすさまじいものだっただろう。



中瀬沼展望台からは、沼越しに、ほぼ南側に磐梯山が見える。双耳峰の鞍部(コル)が山体崩壊のあとで、今立っている展望台の丘が、まさしくその地点から押し流されてきたことになる。こうした火山史と地形の由来を知っていると、風景の見方も変わってくる。